

清涼飲料の歴史

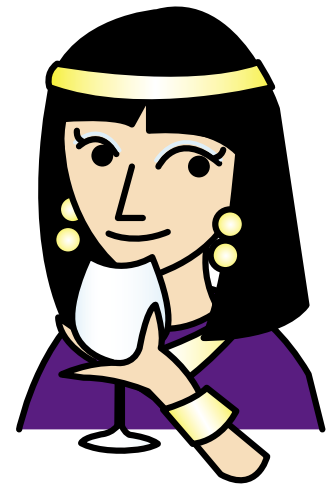
1. 歴史のエピソード

(1) クレオパトラは、炭酸飲料の生みの親！？

エジプトの女王クレオパトラは、美容と不老長寿の秘薬として、ワインに真珠を溶かして飲んだといわれています。

これが炭酸飲料の始まりともいわれていますが、本当のところは不明です。

しかし、昔からヨーロッパでは、地中から湧き出る炭酸ガスを含んだ鉱泉が体に良いとされ、医療用として飲んだり、治療に使ったりしてきました。



お茶やコーヒーに長い歴史があるのと同じよう

に、清涼飲料も実は意外に古い時代からあったのです。清涼飲料の歴史は健康で豊かな生活を送るために、より良い<水>を夢みた人間の知恵の歴史なのです。

(2) ラムネ物語

ラムネびんはイギリス生まれです。ラムネびんの特徴でもあるビー玉で栓をする製法は、いまから約150年前にイギリスで発案されたといわれています。

当時は、ヨーロッパを中心に大いに普及しました。今でも、当時の貴族の城跡からラムネびんが発掘されることがあります。

1) 日本で育った飲み物ラムネ

日本には幕末の頃、長崎に持ち込まれ、その後、神戸や横浜でも製造が始まりました。ビー玉で栓をする玉ラムネは明治20年代から人気となり、大正、昭和、平成の現在に至るまで百年以上の歴史をもつ飲み物として育ち、現在でも日本人に親しまれています。

2) 黒船にラムネ？

幕末に米国のペリー提督率いる黒船が浦賀に来航した際に、艦に「炭酸レモネード」を積んでいました。これを江戸幕府の役人に飲ませたところ、栓を開ける時に「ポン」と大きな音がしたので、役人はびっくりして



「新式の鉄砲か！」と思わず腰の刀に手をかけたというエピソードが残っています。ラムネという名称は、この「レモネード」という言葉がなまったものと言われています。

3) ラムネは夏の季語

俳句の世界では、ラムネは夏の季語になっています。ラムネという言葉のひびきには、夏の炎暑とともに涼風が感じられます。ラッパ飲みをしてびんを傾けると、ガラス玉の音が涼しさと夢をもたらしてくれることでしょう。

4) なぜ、ビー玉が入っているの？

ラムネは他の清涼飲料と違って、ビー玉が製品の「栓」の役割をしています。中身に含まれている炭酸ガスの圧力で、口ゴムとビー玉が圧着されて栓となっています。

ちなみにビー玉の「ビー」は、ポルトガル語の「ビードロ」(ガラス)の略で、ガラス玉のこととされています。

(3) 清涼飲料の歴史年表

【伝説も含めて、清涼飲料にまつわるエピソードや時代の流れを年表で見られます】

1) 世界

【アダムとイブの清涼飲料水】

アダムとイブの時代に、清浄な水に果汁を混ぜたものが、飲まれていたのではないかという伝説があります。

【メソポタミア文明の飲料水加工】

チグリス・ユーフラテス川流域で、河川の汚染と伝染病の危険を防ぐために、独自の飲料水加工技術が考案され、安全な水が作られていました。

【炭酸飲料の発明者クレオパトラ】

世界で最初に炭酸含有の飲料をつくったのは、クレオパトラだという伝説があります。

古代エジプトの女王クレオパトラは、宮中でひそかにワインに真珠を溶かした飲み物を作り、美と不老長寿の秘薬として愛飲していたと、されています。



真珠の^{しゅせいぶん}主成分は、炭酸カルシウムで、酸に溶けると反応して炭酸ガスが^{はっせい}発生します。真珠入りのぶどう酒^{しゅ}は、現在のシャンペン^にに似た飲み物であったのではないかと想像^{そうぞう}されます。真偽^{しんぎ}のほどは定か^{さだ}ではありません。いかにもクレオパトラにふさわしい^{わだい}話題です。

【ギリシャ兵士は鉱泉で傷を治療】

ギリシャの戦い^{たたか}で負傷^{ふしょう}した兵士が、アガメノンに湧く炭酸入りの鉱泉で治療すると傷が治ったという伝説があります。



【鉱泉の水は医療用】

ヨーロッパでは、ローマ時代から今日^{いた}に至るまで、温泉^{おんせん}（鉱泉）が体に良いとして医療用としても飲まれています。

【世界初の人工炭酸飲料】

1750年、フランスのヴェネル^{きょうじゅ}教授が、酸性^{さんせい}の水に炭酸塩類^{たんさんえんるい}を加えて「エーレテッドウォーター」を開発^{かいはつ}、医療用に提供^{ていきょう}を始めました。

【炭酸飲料製造の王道を發明】

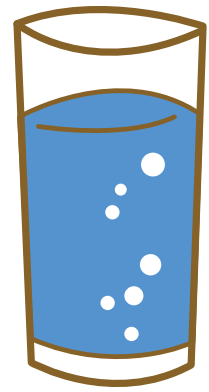
1770年頃、イギリスのジョセフ・プリーストリーが、炭酸ガスを水中に飽和^{ほうわ}させる^{かつきてき}画期的な^{ほうほう}方法を發明しました。



歴史上では、ジョセフ・プリーストリーが、^{じっさい}実際の炭酸飲料のつくり方を考え出した世界最初の清涼飲料水發明者とされています。彼は、それ以前に、地球上での主要な^{しゅよう}元素^{げんそ}である酸素^{はっけんしゃ}の発見者^{ゆうめい}として有名でした。

【炭酸水に果汁を入れた清涼飲料水が誕生】

1808年、アメリカの薬剤師タウンゼント・スピークスマンが、炭酸水を果汁で味付けしたものを売り始めました。これが、現在の炭酸飲料の元祖となるものです。



【トマトジュースが誕生】

1928年、アメリカでトマトジュースが誕生しました。

【初のスポーツドリンク開発】

1965年、アメリカで初のスポーツドリンクが開発されました。アメリカンフットボールの選手の間、過激な運動による多量の発汗で脱水症状が続発したため開発されたと言われています。発汗で失われた水分、エネルギー、電解質成分を効果的に補給する目的で開発され、当時は粉末の状態で供給され、必要に応じて水に溶かして用いられました。1968年、スポーツドリンク飲料を作り販売を始め、次第に普及しました。

2) 日本

【ペリーと共に、ラムネが日本上陸】

1853年、ペリーが飲料水としてレモネード（後のラムネ）を艦に積んで日本に持ち込みました。



【長崎で外国人がラムネの製造販売】

1860年、英国汽船により長崎にラムネが持ち込まれ、長崎在住の外国人がラムネの製造販売を始めました。

【国産第1号！ 日本人がレモン水を製造販売】

1865年、長崎で藤瀬半兵衛が外国人からラムネの製法を学び、「レモン水」と名付けて売り出しました。これが国産第1号であろうと言われています。レモネードの「レ」が「ラ」に聞こえ、語尾が消えて「ラムネ」といわれるようになったそうです。

【横浜でシャンペンサイダー等販売】

1868（明治元）年、イギリス人薬品商ノース・レーがラムネ、ジンジャエール等十数種の清涼飲料を製造販売しました。

【ラムネのブランド『十八番ラムネ』登場】

1885年、神戸でシーム商会が発売開始。

【ミネラルウォーターの製造は明治時代中期が始まり】

1884（明治17）年、天然炭酸鉱泉水「平野水」が発売されました。大阪の多田村に御料地であった銀山があり、その近くに炭酸泉が湧き出ているのが発見されました。この銀山は三菱に払い下げられ、摂津の国平野郷でびん詰めし、発売しました（三菱商会）。これが、日本でのミネラルウォーターの歴史の始まりです。

1890年にはイギリス人クリフォード・ウイルキンソン氏が宝塚で天然鉱泉をびん詰め販売していました。日本は良質で豊富な水に恵まれ、数多くの鉱泉が湧き出ますが、その頃は六甲山脈を中心とする地方のものが代表的なものでした。

* 「鉱泉」：鉱物（ミネラル）質またはガスを多量に含む泉。自噴（地下から自然に吹き出る）する地下水の内、水温が25℃未満のものを鉱泉水（自噴しないものは鉱水）、25℃以上または成分が温泉法に適合するものを温泉水という。

* 「御料地」：皇室（天皇家）の土地

* 「摂津の国」：今の大阪府、一部は兵庫県。

【ラムネを飲むと“コレラにかからない！”】

1886年、コレラ大流行の際に、「ラムネを飲むとコレラにかからない」と新聞で報道され、ラムネブームが到来しました。

【ビー玉入りびんラムネ発売】

1887（明治20）年、イギリス人コッド発明の玉ラムネびんが始めて輸入され、大阪で売り出されました。

1888年、キュウリびんがすたれ、玉ラムネびんが流行しました。

【王冠使用のサイダーを新発売】

1904年、横浜で秋元巳之助の金線サイダーが、王冠栓で新発売されました。以来、王冠栓のものをサイダー、玉栓のものをラムネと呼ぶようになりました。

【トマトジュースが国産化される（びん）】

1933年、トマトジュースがびん詰め製品で国産化されました。

【アメリカからバヤリースオレンジ輸入】

1949年、果実飲料が清涼飲料の仲間入りをし、オレンジジュースブームが起きました。

【黒い飲料コーラの登場】

1949年、アメリカからプロ野球チームとともに来日しました。

【トマトジュースが缶詰で発売】

1950年、トマトジュースの缶詰製品が新発売されました。

【果実飲料の本格的な商品化】

1951年、果実飲料が本格的にジュースとして商品化され発売されました。果実飲料発展の先駆けとなりました。

【希釈用果実飲料の生産が始まる】

果実飲料製造業は、オレンジを直接飲用する果実飲料のびん詰めが始まりです。その後、業務用、進物用、家庭用として、1953～1954年頃から化粧びん詰めによる希釈（薄めて飲む）用果実飲料（5～6倍程度に希釈）が生産され始め、年々多種多様な製品が研究、開発されていきました。

【日本初の缶入り飲料発売・ワンウェイ容器の登場】

1955年、日本初の缶入り飲料が発売され、缶詰めオレンジジュースが出回り始めました。これが、ワンウェイ容器が清涼飲料に使われるようになった最初です。

それまでは、清涼飲料はガラスびんに入れられていて、飲み終わった後に、容器をお店などに返却するリターナブル容器が使われていました。ワンウェイ容器の登場により、清涼飲料の利用シーンはますます増えていきました。

【自動販売機による清涼飲料の販売始まる】

1955年、自動販売機による清涼飲料の販売が始まりました。

【コーラ飲料の本格的な製造販売開始】

1961年、コーラの本格的な製造販売が開始されました。

【初のドリンク剤発売】

1965年、初の小びんドリンク剤が発売されました。

【初の缶入り炭酸飲料発売】

1965年、初の缶入り炭酸飲料（コーラ）が発売されました。

【缶入り飲料にプルタブのふたが開発される】

1968年、缶入り飲料にプルタブのふたが開発されました。

【日本生まれの清涼飲料缶入りコーヒー誕生】

1969年、世界初の缶コーヒー飲料が発売されました。

そして、1970年には、その日本オリジナルの清涼飲料が大阪万博^{ばんぱく}に登場し、話題^{わだい}を呼びました。

それまでは、おもに乳業メーカー^{にゅうぎょう}がびん入りや紙容器入り^{かみようき}で販売していた、いわゆる「コーヒー牛乳」がほとんどでした。これに対し、新しく開発された缶コーヒーは、レギュラーコーヒーから抽出した^{ちゅうしゅつ}コーヒーを中心に、これに乳分^{にゅうぶん}を加えたものでした。

その後、1973（昭和48）年には、自販機^{じはんき}による缶コーヒーの販売が始まりました。最初はコールド専用の自販機^{せんよう}だけでしたが、まもなく世界でも類^{るい}を見ない温かい飲料も販売できるホット・アンド・コールド飲料自販機が1976（昭和51）年10月に最初に開発されました。

缶コーヒーは商品^{しょうひん}自体も画期的^{かくてき}でしたが、このホット・アンド・コールド飲料自販機^{ひやくてき}の登場などにより飛躍的^{じゅうよう}に需要^ふが増え、今日^{こんにち}に至^{いた}っています。

【ミネラルウォーターが業務用で市場が拡大】

ミネラルウォーターが初めて注目^{ちゅうもく}されたのは昭和40年代後半で、水質汚染^{すいしつおせん}に悩み^{なや}始めた大都市圏^{だいとしけん}においてでした。

1970年、大手酒販メーカー^{おおてしゅはん}が製造販売を始めたことで、業務用として市場が拡大。専業企業^{せんぎょうきぎょう}と大手酒販メーカーがびん入りで、ウイスキーなどの洋酒^{ようしゅ}の水割り用^{みずわ}に、主に業務用で販売しました。この

頃は、一般家庭で「お金を払って水を買う」という習慣はなく、定着
しませんでした。

【缶飲料、自動販売機市場に導入】

1970年、缶飲料が自動販売機市場に導入されました。

<次々にオリジナル飲料が誕生>

【1979年豆乳が発売】

それまで、豆乳は大豆のにおいがして飲みにくいところがありまし
たが、脱臭法や味の改良が進歩し、商品として豆乳が発売されまし
た。

【初のスポーツドリンク発売】

1980年、初のスポーツドリンクが発売されました。それまでの粉
末製品以外に、缶飲料とびん入り飲料として発売され、新しい市場
が形成されました。（これ以前も粉末主体の市場はありましたが、
規模はとても小さく、この年に事実上、スポーツドリンク市場が新
しく創り出されました。）

元々、スポーツの時に飲む「水分補給のための飲料」として開発さ
れたものですが、その開発の意図とは別に、日常の生活シーンに
も密着し、飲用シーンが広がりました。通常の清涼飲料としても若
い年齢層に急速に普及していき、多くのメーカーが参入しました。

日本では、1976（昭和51）年頃、アメリカから粉末タイプで輸
入販売されましたが、当時は競技中に水分を摂取することは望まし
くないとされている時代でした。

しかし、その後スポーツ時には、水分を適度に摂るのがよいとされ、
1980年に液体タイプの飲料として大手製薬メーカーが発売して

以降、イオンやエネルギー供給飲料として各社の製品が市場に出回りました。

【1981年缶入りウーロン茶が発売】

販売当初は、現在のようなのどの渴きを癒したり、食事のお供としての需要ではなく、洋酒などのウーロン割りなどミキサー（割って飲む）ドリンクとしての需要など、家庭外での飲用を中心に市場が拡大しました。

1983年以降は、チューハイブームとも重なり、生産量が急増しました。缶入りによるアウトドア商品として、ホットまたはコールドによる自動販売機の展開などで需要がますます拡大しました。さらに、大型PETボトルの登場で家庭内需要が急速に拡大し、その後の無糖飲料ブームのきっかけをつくりました。

【ワンウェイガラスびん入り飲料発売】

1982年、ワンウェイガラスびん入り飲料が発売されました。それまでは、リターナブルびん入り飲料が主流でした。

【PETボトルの清涼飲料が製品化】

1982年、食品衛生法改正により、清涼飲料向けにPETボトルの使用が認められ、製品化が始まりました。製品第1号は、オレンジジュースでした。

その後、ウーロン茶飲料やブレンド（混合）茶飲料などを中心に、1.5リットルや2リットルなどの大型容器がPETボトルの大半を占めるようになりました。

【初の缶入り緑茶飲料発売】

1985年、初の缶入り緑茶飲料が発売され、緑茶の新しい飲用スタイルが始まり、緑茶飲料市場の形成のきっかけとなりました。

【家庭内需要でスポーツドリンク成長】

1985年には、大型PETボトルの採用により、スポーツドリンクの需要はアウトドアから家庭内にも広がりました。

【1988年、食物繊維飲料、爆発的人気】

以後続々と健康飲料が登場しました。

【ミネラルウォーターが家庭用に急成長】

【茶系飲料も急成長】

清涼飲料は嗜好飲料から、より食生活に密着した飲料へと幅を広げました。

【ミネラルウォーター】

当初は主に業務用で販売していましたが、1983（昭和58）年に大手国産メーカーが大型のPETボトルを発売しました。以後、各地の自然水、天然水、名水などが、業務用ではなく家庭用を目指した飲料として大都市で相次ぎ発売され、家庭用（小売用）ミネラルウォーターがスタートしました。環境汚染や水道設備の劣化したマンションが問題となってきた昭和60年代からは、生産販売が本格化しました。

1986年には輸入ミネラルウォーターも急増し、小売需要に拍車がかかり、本格的な家庭用ウォーターの時代に入り、いわゆる水ブーム”となりました。

また、消費者の食生活における健康志向、天然志向がますます強くなり、「おいしい水」「安全な水」に対する需要が急速に高まり、業務用に加えて一般家庭にも着実に普及し始めました。

【ウーロン茶】

大型PETボトルの登場以来、家庭内需要が大きく伸びてきました。大手企業の参入、活発なテレビコマーシャル、日本人の味覚に合った商品特性、小型PETボトルの普及などで、2001年に生産量のピークを記録しています。

【日本茶飲料】

「麦茶飲料」と「緑茶飲料」で形成された日本茶飲料は、昭和50年（1975年～）代に形成された市場で、新分野飲料の中では比較的古いものですが、飲料市場の中で存在感が出始めたのは平成に入ってからでした。

市場が創り出された当初は、家庭内で簡単につくることができる飲料を、缶入りとして有料で販売することを心配する声もありました。しかし、「冷たいお茶」は、予想以上に消費者に受け入れられ、生産量の増加が続きました。自然・健康・無糖など、消費者の健康志向に合った商品特性が受け入れられたのです。

1993年に「ブレンド茶（混合茶）飲料」の市場も創り出されて日本茶飲料のカテゴリーに加わり、さらに市場が拡大しました。日本茶飲料は、爆発的な伸びで飲料総市場を拡大しました。

【阪神・淡路大震災で被害、緊急飲料と救援に全力】

1995年、阪神・淡路大震災では飲料業界にも大きな被害がありましたが、緊急飲料と救援のために全力をつくしました。

【小型 PET ボトルの登場】

1996年、業界が消費者の需要にこたえる500ミリリットルサイズのPETボトルを導入しました（業界の自主規制廃止による）。

1997年から、PETボトル飲料の生産量が急速に拡大しました。「軽く割れない、透明で中身が見える、リキャップ（再び栓をすること）できる」などの利便性が受け入れられました。

【PET ボトル、ガラス容器のリサイクル開始】

1997年、容器包装リサイクル法によるPETボトル、ガラス容器のリサイクルが開始されました。

【機能性「ニアウォーター」発売】

1998年、いわゆる水感覚の「機能性ニアウォーター」が相次ぎ発売され、ブームになりました。

【2000年対応(Y2K)でミネラルウォーターの成長加速】

1999年、いわゆる2000年（Y2K）問題から、ミネラルウォーターの備蓄需要が発生し、国産ミネラルウォーターの生産量は急激に拡大しました。これまでミネラルウォーターを飲用する習慣がなかった層に飲用機会を与える結果となりました。

【缶飲料とPETボトル飲料の生産量が逆転】

2000年、缶飲料とPETボトル飲料の生産量が逆転しました。

【新しいコンセプトによりスポーツドリンクが大きく伸びる】

2000年、スポーツドリンクでは、水分補給以外に、「必要のないものを排出する」という新しいコンセプトの新ブランドが市場に参入

し大ヒットしました。スポーツドリンク市場は、健康意識^{いしき}の高まりを受けて、2002年まで急速に拡大のスピードを増しました。緑茶飲料などと並ぶ^{せいかつ}“生活飲料”としての^{かつこ}確固たる^{ちい}地位を^{きず}築きました。

【緑茶飲料が大きく伸びる】

2000年、緑茶飲料が大型新製品の大ヒットなどで大きく伸びました。

日本茶飲料急成長の背景^{はいけい}には、消費者のライフスタイルの^{へんか}変化とPETボトルの普及、そして緑茶飲料の急速な拡大がありました。リキャップ^{さいせん}（再栓）できるPETボトルの普及でドライバーや外出時の^{がいしゅつじ}携帯用としての^{けいたいよう}需要も増え、また^{じむしょ}事務所などの^{しょくば}職場での消費など、新しい市場を創り出し、需要拡大につながりました。

2000年、大ヒットした新ブランドが発売されたことで緑茶飲料の市場が本格化し、1999年に生産量が66万キロリットルだったのが、2000年に一気に100万キロリットルを^{とつば}突破しました。それ以降も各メーカーが続々と大型の新製品を出し、市場はわずか4年間で^{ばいぞう}倍増しました（2000年101万キロリットルから2004年236万5000キロリットルに）。

【アルミ製ボトル缶の登場】

2000年、リシールできるボトルタイプのアルミ缶が登場しました。

【アルミ製ボトル缶容器の採用が広がる】

2001年、清涼飲料業界にもアルミ製ボトル缶容器の採用が広がりました。

【ホット対応PETボトルが登場】

2001年、^{かおん}加温して販売できるホット対応PETボトルに各社が参入しました。

【アミノ酸飲料が大人気^{だいにんき}】

2003年、アミノ酸飲料が大人気となりました。

【ボトルtoボトルのPETボトルが登場】

2004年、飲料用のボトルtoボトル^{さいせい}（再生されたPETボトル）が、初めて店頭^{てんとう}に並びました^{なら}。

【スチール製^{ひろくち}広口ボトル缶が続々登場】

2004年、缶^{ひろくち}コーヒーを中心に小型のスチール製広口ボトル缶が続々登場しました。

【飲料自販機^{しょざいちひょうじ}への所在地表示がスタート】

2004年、自動販売機への所在地表示ステッカーの貼り付け^はがスタートし、自販機^{まち}が街の案内板^{あんないばん}になりました。現在は、福岡^{ふくおか}・大阪から全国へ（福岡市は前年から）と拡大しています。こうした活動^{かつどう}が評価^{ひょうか}され、2005年、全国消防庁会^{ぜんこくしょうぼうちようかい}から感謝状^{かんしゃじょう}を授与^{じゅよ}されました。